

第2図 採食行動と毛づくろい行動の頻度の日周リズム

集中的な採食は1日3回見られ、特にあとの2回が大きい。毛づくろい行動は、多少の時刻のずれはあるが午前8時から11時の間に1つの大きな山を有する。すなわち、朝、1回目の集中的採食を行なった後、群れはかなり長時間の休憩にはいる。1時間前後の休憩の後、次の採食地へ移り2回目の採食活動を行なう。採食はそれに続く休憩に徐々に変わっていくが、午後からの休憩はそれほど群れ全体に支配的なものではなく、一方では採食しているものもあり、他方では休んでいるものもあるという具合である。午後は急速な移動、または長時間の移動が多く、したがって遊動距離は午前より午後の方が大きい。1日の遊動距離は3日とも地図上で1.8 km前後であるが、そのうち午前中の遊動距離は0.3~0.6 kmにすぎなかった。

高宕山 Ib 群の遊動生活¹⁾

岩野泰三・西田利貞(東大・理)

高宕山におけるニホンザル野生群の研究は、岩野・四元・西田の共同研究として行なわれてきた。1972年1月より、'73年2月までの調査日数は123日であり、T-Ib群の総観察時間は'70年10月以降通算して470時間に達した('70年10月以降の全調査日数は240日、うちT-Ib群の集中的調査日数は158日である)。

T-Ib 群の周年遊動域について

(1) コア・エリア

追跡したすべての遊動路を植生図上に投影してみると、遊動路の集中する地域があることが注目される(第1図)。この集中した地域は、高宕山周辺に広がる大きなスギ・ヒノキ植林地の北と、T-I群餌場(石射太郎)との間の地域と、高宕山西・南斜面のモミ自然林を含む大部分落葉広葉樹2次林の地域との2カ所である。この遊動路の集中している地域を、コア・エリアと呼んでよいだろう。

遊動路は一般的に言えば、植林地を避けることが観察されており、高宕山の北に広がる大きな植林地が遊動路の集中する地域を2分したのかも知れない。なお、1~2月の遊動路は植林地を避けているとは思われないが、10月の遊動路は明らかに植林地を避けているようであり、対照的である。

(2) 周年遊動域の境界

ニホンザル野生群にとって、遊動域の境界は多くの場合固定的なものではないだろう。しかし、T-Ib群の観察では、石射太郎から南に延びる尾根はかなりはっきりした西北方向への境界である。T-I群が餌場にいる場合はもとより、秋にT-I群が餌場にはいない場合でも、T-Ib群がこの線を西・北に越えた例は観察されていない。

このような、かなり厳格な境界がどのような機構から生みだされるかは、興味ある問題である。

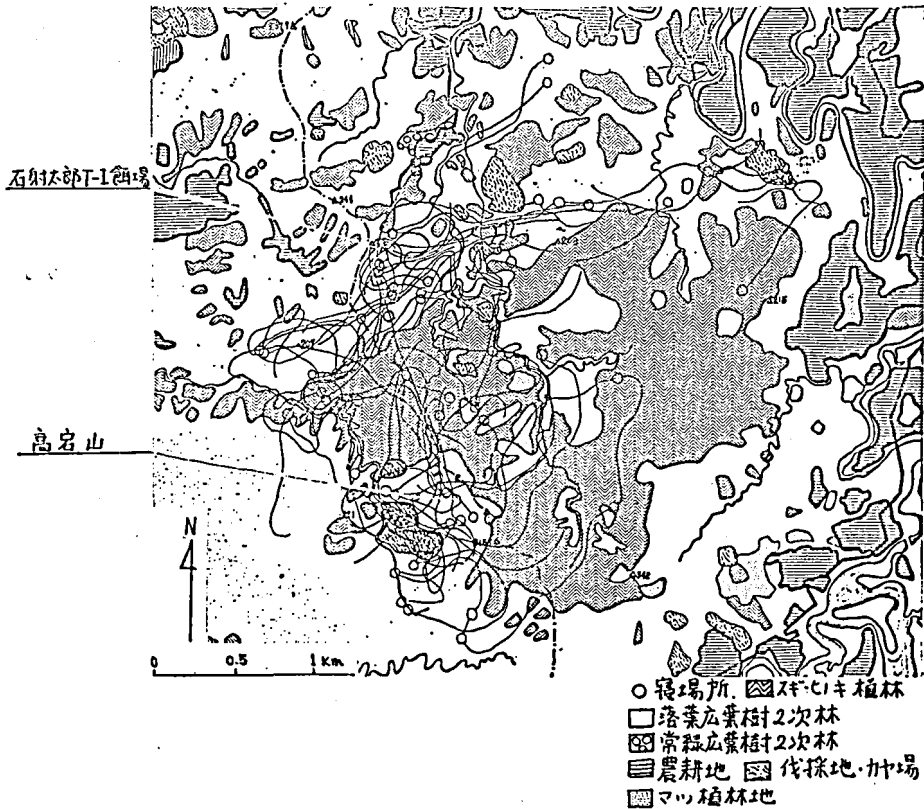
(3) 霊長類研究所年報 Vol. 2, p. 23 への追加と訂正

T-Ib群の周年遊動域は約6.5 km²である。年報中12 km²内外は誤り。7~8月の遊動域の広さについては、予期されたような狭い範囲ではないことが明らかになった。また、4~5月の遊動域もかなり広いと思われるが、周年遊動域のどれ位を覆うかははっきりしない。

遊動域が季節によってその形を変えることは、先年の報告の通りである。とくに8月下旬から10月にかけての遊動域は'71年とほとんど変わらず、狭い範囲でしかも往復する振り子のような遊動を行なっている。

10月から12月にかけて遊動域はやや拡大する傾向があ

¹⁾ 四元伸子(東大・理)との共同研究。



第1図 T-Ib 群の全遊動路 (1970~1972)

るが、この拡大は連続的におこるのではなく、10月下旬から11月上旬にかけて、おそらくモミ林中のヤブニッケイの葉の熟すことにひきよせられて、一時期きわめて狭い範囲の遊動を行なうことがある。

このような例は、遊動域の季節的な変化と呼ばれる内容が極めて雑多であることを示している。遊動域の周年的変動は、遊動する地域の自然条件、とくに植生、食用植物の分布と量、その食用に適した時期を綿密に調査する必要がある。

T-Ib 群の遊動距離について

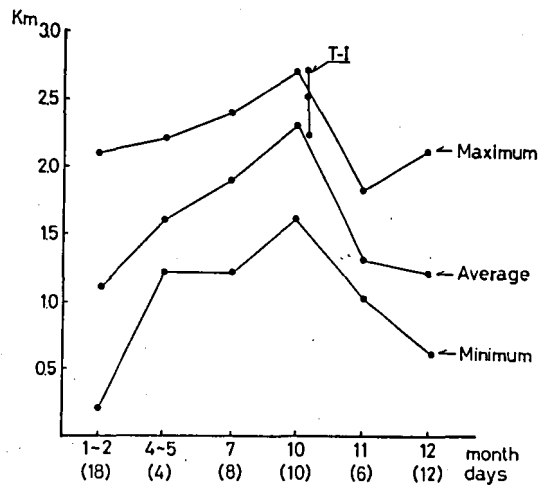
'70年12月から'72年11月までのT-Ib群の遊動距離を調査期別に集計し、1日の遊動距離の最大値・平均値・最小値を求めたものが、第2図である。この図は次の3点の欠点がある。

① 11月の最大値が12月よりも小さいのは、あるいは例数が少ないことによるのかも知れない。

② 調査期ごとのまとめとはいっても、7月は2年分の集計である。

③ 追跡日数が長くなるほど、最大・最小値の差が大きくなっている。

上記の欠点を考慮に入れても、10月に1日の遊動距離



第2図 T-Ib 群の1日の遊動距離の季節変化

が最大となることははっきりしている。また、1~2月はやはり遊動距離が短い。これは'72年の年報報告中のべた結論と一致している。

なお、T-I群の10月の遊動距離は、T-Ib群のそれとほとんど同じ値を示している。T-I群が餌づけされ、餌場に定着した群れであることを考えると、非常に興味深

い。T-I 群は当時約180頭の大群であるが、遊動距離は頭数の多少とかかわりなく、むしろ“秋の”遊動距離という傾向が出るのは注意したいところである。

遊動時の群れ構造

ニホンザルの野生群においては、群れの断片を部分的に観察することが普通であり、特殊なケースを除いては群れのほとんど全数を観察することはない。これは野生群にあっては一列縦隊で移動することがまれであることにも起因する。確かに、かなり多数の群れの一部分は直線的に一列に移動するが、他の部分はこれとは離れて移動している。幸い T-Ib 群と T-Ia 群に関して、群れのほとんど全数が一列縦隊で移動してゆく例を観察したので報告する。この場合にも、若いオスのグループはこの縦隊から離れて移動していた。

【例1】'72年10月26日、13:17から13:40まで、伐採跡地尾根上を移動する T-Ib 群のほとんど全数を観察した。各個体が接近していて、下生えに隠頭しているため数は正確には数えられなかった。

群れは12:40頃から13:00頃まで、モミ林中のヤブニッケイの実を集中的に採食した後に移動を開始した。ゆっくりした移動である。

13:07に、群れの通過点の南約200mの尾根上を、オトナ・オス(8才以上)1頭と4~7才のワカモノ・オス2頭、計3頭が群れの進行方向と同方向に平行して移動するのを観察した。

13:17 5頭以上、すべて地上を移動(以下同じ)。つづいて、リーダー第1位「ヤベテ」があらわれる。以下、5組以上の母・アカンボ・グループを含む20頭内外の一団が、きれ目なく続く。

13:30 リーダー第2位「ブルーデン」あらわれる。オトナ・オス(大型)が10頭以上のメスを含むグループの最後尾について移動する。「ブルーデン」はこのグループの通りすぎるまで尾根上の木上に待って、ソリタリーの木ゆすりに答えて木ゆすりしたあと、続いて移動する。

13:35 オトナ・オス(大型)と4頭のワカモノ(オス1頭の他は性不明)の計5頭のグループが移動する。

13:40 発情した若いメスを含む3頭とオトナ・オス1頭、計4頭が移動する。

【例2】'73年4月11日、11:15から11:35まで、田の縁を移動する T-Ia 群のほとんど全数を数えた。

群れは、10:30ごろより、田のレンゲを採食していたが、11:15より移動を開始した。

11:15 リーダー格とみられる2頭のオトナ・オスと、6頭のオトナ・メス、1~2才のコドモ3頭、計11頭は一緒にかたまわってレンゲを食べていたが、徐々に移動を開始した。これに続いて、群れの各個体が田の縁を

しだいに急速に移動しはじめた。全群が田を越えたのは11:35である。

同じ時刻に、群れの東約100mのところまで10頭以上のグループ(若いオス?)が一団となって県道を渡った。またこの他に、11:15以前に県道を既に渡っていたオトナ・メス1頭と、その子らしい小型のサル1頭を観察した。

T-Ia 群のこの日の移動時の列は、以下の通り。(A:オトナ, ch:0~1才, Y:Aとchとの中間, []はまとまりを示す。ゴチックは、子が母の体にくっついていることを示す)。

[2A♂+6A♀+3ch]+1A♀+1ch+1Y+1A♀+1A♀+1Y+1A♀+1A♂+1Y+1Y+1ch+1ch+1Y+1A♀+1ch+1ch+1ch+1Y+1Y+1A♀+1ch+1ch+1ch+1A♀+1ch+1ch+1Y+1Y+1ch+1ch+1ch+1ch+1A♀+1ch+1ch+1ch+1Y+1A♀+1Y+1ch+1A♀+1A♀+1ch

群れは、3A♂、18A♀、1A♀、22ch、11Y、?1の計56頭。この他に10頭内外のおそらくワカオスのグループがいる。'72年3月5日の計数では73頭と数えられており、自然増をみこんで80頭位の群れであるが、'73年4月11日の数はこの大多数といってよい。

【考察】この2つの例は、ニホンザル野生群の群れの構造のすべてを示しているわけではない。T-Ib 群の観察は発情期(10月中旬~2月中旬)にあたっており、T-Ia 群の観察は出産期(4月中旬~7月上旬)の直前である。このような時期の相違は、2つの例が同じ水準上で取り扱われえないことを示している。T-Ib 群の場合は、オス監督型とでもいうように、各サブ・グループに1頭、あるいは2頭のオトナ・オスがつき、T-Ia 群の場合は先頭集団にオトナ・オス2頭がつき、第3のオトナ・オス(7才位)は、観察者と移動する群れの間を監視するように行動していた。

いずれの場合も群れの大多数と離れて移動するおそらくワカオスのグループがいることは注目される。

房総丘陵におけるニホンザル野生群の遊動域成立要因としての植生¹⁾

高杉 欣一(東大・農)

房総丘陵のニホンザル野生群の生態に関する共同研究は、房総丘陵の自然史的研究の一環として行なわれ、筆者らは植生を分担しているが、植生についてはサル生息環境の現状記載のため現存植生図の作成を第一とし、10年後20年後……にそなえることにした。群れ分布密度が

¹⁾ 小金沢正昭(東京農工大・農)との共同研究。